



へんろ
四国徧禮 野宿ノ記



平成廿七年_{癸巳}～廿八年_{壬辰}



(文化四年版 四国徧禮絵図)

寓多羅亭鈍助 述之



(宥辨真念「四國徧禮道指南」より弘法大師坐像、江戸時代)



(「四国邊路道指南」より二人の遍路と荷物運搬人、江戸時代)

前回第1回目の四国歩き遍路は泊まりを全て旅館や民宿にしたために、遍路の源境である“苦行”も何も無く、従って瑞兆も御利益も無い単なる物見遊山に終わった。

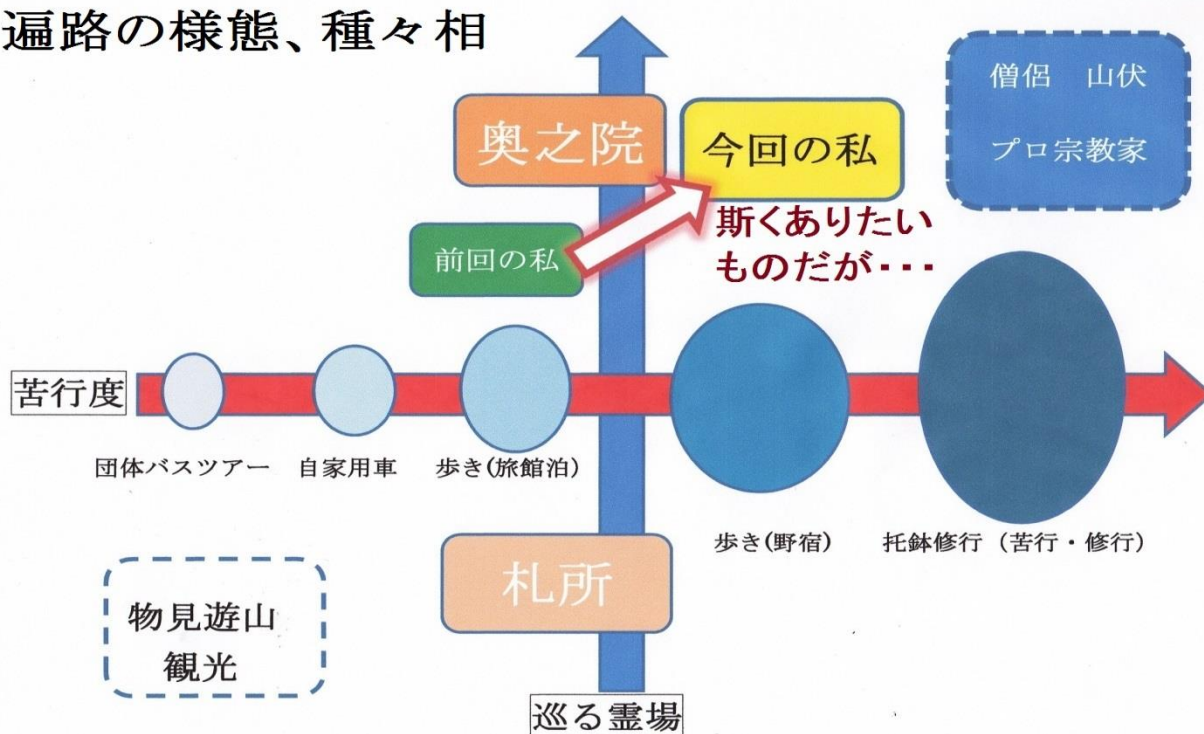
今回はそれを反省して、多少は遍路修行の根本に戻りたいものと野宿を基本に歩いてみた。

遍路自体のことは第1回目の遍路紀行*に書いたので、**本稿は主に仮寝を結んだ野宿の様子、そこで出合った事柄などに限定して記した単なる個人的な備忘録である。**

しかし、書き終えて再読してみれば、またまた般若湯の夜遍路と物見遊山の繰り返し、これでは“苦行”も“修行”もあつたものではなく、従って瑞兆やご利益を期待できる筈もなし。全く修業が足らんワイ。

*第1回目の遍路の様様「第1回四国遍路紀行」は、トップページからジャンプして下さい

遍路の様態、種々相



←左のために、
当然ながら
右のような瑞
兆を期待する
術もなし ⇒

嗚呼、情けなや、
情けなや



その1

(2015 年 7 月 21 日～23 日)

■7 月 21 日

朝自宅発、夕刻高德線「板東駅」着。1 番「霊山寺」。本日の仮寝の場所は霊山寺近くの「ドイツ村ハイランド公園」なる小公園の四阿。高松自動車道のガード下の川の土手にあった。四阿は清潔に掃除されていたが、蚊に苦しめられた。



この先 30 分ほど歩いた川畔には鳴門ドイツ館と道の駅「第九の里」があった。大正 3 年、第一次世界大戦に参戦した日本は、ドイツの租借地であった青島を攻撃し、4700 人のドイツ兵捕虜を日本に送ったが、そのうちの 1000 人が鳴門に送られ、この地にあった俘虜収容所に収容された。この収容所では、捕虜の人権を尊重した対応がとられたので、捕虜は自由で文化的な収容所生活を送ることができ、ベートーベンの第九交響曲の日本初演もこの収容所でなされたのだそう。そういう具合で鳴門とドイツは今でも友好の絆で結ばれているという。

そのドイツ館の敷地の中の小高い丘に四阿があった。なかなか快適な仮寝を結べそうな四阿であったが、既に先客遍路が陣取っていたので、ここは遠慮して上の公園に戻ってここの四阿の軒下を借りた。

夕食は、霊山寺門前町の「へんろ亭」という汚い遍路食堂に行った。歩き遍路や野宿遍路の情報が置いてあった。ここの御主人曰く、「野宿遍路は大変結構なことであるが、守るべき野宿遍路の心得を一つ。『野宿は必ず公衆便所がある所で行うこと。たとえ立小便でも、付近に住む住民や散歩犬の迷惑となる』。成程なるほど、合点ノ介。

■7 月 22 日

翌日は、第 2 場「極楽寺」から第 3 番「金泉寺」、第 4 番「大日寺」、第 5 番「地藏寺」、第 6 番「安楽寺」、第 7 番「十楽寺」まで打ち、今宵の宿は上板町^{かんやけ}の神宅まで戻ってそこにある遍路小屋に泊まろうとしたが、途中にあった昨年の遍路道中でも泊まった「民宿・寿食堂」の前でビールの誘惑に負けて腰が折れてしまって、ここに泊まってしまった。嗚呼。

折からの台風の襲来で夜半から暴風雨と雷となり、田圃の中の歩道では雷様に臍をとられそうになったこと、また、遍路道の山道には土砂災害警戒情報が出たために、やむなく今回は 7 月 23 日朝ここで打ち切って一旦帰宅し、後日日を改めて再出発することとした次第ナリ。

(その 1 了)

「四国遍路野宿ノ記」目次に戻るには、画面最上段最左端の戻るボタン  で戻って下さい